

ものと見へて一面に紫色となつて腫れ上がつて居るから、是れは醫者を呼んで種々介抱をして居る。

其處で一先づお豊の部屋を取調べると昨日までも今日までも左程にも思つて居らぬ押入れの中なぞは數多の鳥の毛、然かも天井や椽下には澤山の人骨が夾ば腐敗に傾いて居るのは定めて女中達ちの殺されたる死骸に相違あるまい。

然るに此處に一ツ不思議といふは先年江戸表に於いて件人の怪猫が半左衛門を殺さんとして假りに女房の姿を借りて小森に近寄つたる處、却つて其れを見破られ、主君の手を持つて討ち取らんとする時に千筋の鎖を切つて逃げる處を、半左衛門が小柄を取つて早速の手裏剣にした事がある其の小柄と豫れて鞠子の宿に於いて紛失したる五郎正宗の名劍と岩麴の名香の三品が出た。

是れに依つて愈々半左衛門は青天白日の身となり其の三品を光茂公に差出

した

其處で半左衛門は改めて光茂公へ對面をなし、重役共と共に梅の御殿の一任一任を物語りをすると餘まりの不思議に呆然として居られたが、光「イヤ半左衛門、假令討ち漏らすとも今後十分の注意をなし怪猫退治を忘るでないぞ」と改めて五百石を頂戴する。

尙高木、伊東の兩人も新知二百石を以つて召抱へる事となつたが、以前搔かれたる傷が中々全快をしない、醫者の云ふのには是れは却つて攝州有馬に入浴をしたれば早やく全快をするであらうといふなら、半左衛門からも惣太に話をして有馬へ行けといふ、惣太も病には勝つ事出来ず、先づ怪猫の處在の分かるまでは養生をしようといふ事に入湯に出掛けた。

扱て後には半左衛門三平等種々猫の在所を探がして見たが更らに分らない而已ならず、昨日までも梅の御殿から市中市外へ見へて夥多の人命を亡くした

といふ怪しき光りも無くなつて仕舞つた、然るに是れ迄で御部屋お豊の方に阿
 諂をなして既に鳥部屋仲間の首を取らんとしたる關傳六郎石田來助の兩人
 わけて石田は以前龍造寺家の家來であつた事を詳さに申上げると、光茂公も
 非常に怒られて 光「其は容易ならざる者共である、早速齋田主膳に於いて
 斬首の刑に處す可し」といふ口上、依つて兩人は刑を申渡した城下外づれの刑
 場に於いて打首の刑に處する事となつたが、是れを聞いたる夥多の見物人は
 此の有様を押すなくで見物をして居る。
 今しも第一番に關傳六郎の後から、見事に首打落とし第二番に石田來助の
 首を討たんとする時しも、コヲ抑も如何にコヲ如何に、俄かに起こる轟々たる
 怪風につれて一陣の黒雲は天の一方より落ち來たりたる故へ、黒山の如とき見
 物は、コヲ何事ならんと、生きたる心地もなく右往左往と逃げまごふ其の間に
 首斬り役人も、餘まりの事に、アーツと驚ろき搦と倒れて呉きれて居ると、今

しも件人の黒雲は其れに控へたる石田來助の身体を押し包みて何方とも無く影
 を没した。
 齋田主膳部下の者も最早や如何んともするに由なく、漸やく關傳六郎の仕置き
 を終つた而已にて引上げた。
 話し代つて石田來助は今や自分の最後と思つて居つたが、俄かに其の身は宙
 飛ぶ如とくに覺へつゝ、夢現ともなく何處に落ち來たると、何者とも知れ
 ず聲あつて △「如何に來助心を確かに持てよツ……」と云はれてアツと氣
 の付いたる石田は、シロく〜と附邊を見ると、今の今まであつたる仕置場は何
 處へ行つたか隠もなく、然かも其の身は一方には堂々として青みを帯びたる急
 流を控へ、又一方には峨々たる峻山を控へ、其の前に禪様のものを敷いて
 ツーツと坐せる其の人は、着たる着類はズダ〜に引き裂かれ然かも數ヶ所の
 傷を負ひて色青ざめたるは是れぞお豊の方であるが、其の側には十名ばかり、

是れも等しく重軽傷を負ひたる女中を従へ、只だ何んとなき物凄き光景である。

豊如何に石田來助、吾れこそ其の以前龍造寺家に飼はれたる半面斑の烏猫であるが、其の魂は檢校又一郎の母政である、豫れて罪なくして又一郎は光茂の手にかゝり其の恨み止み難たく、何卒丹後守を亡はさんと遂ひに神通力を以つて、最初小森半左衛門を惱ましたるも未だ命を取るに至らず、止むを得ず斯くお豊の方と姿を變じ様々鍋島家を惱ますとは雖も何分小森半左衛門の爲めに妨げられ然かも却つて梅の御殿を追はれてかゝる山中に逃げ延びたるが今日其方の仕置の事を知り神通力を以つて救け出だしたるからは、今より此の山に足を止せ、若し城中より人数を差向くる事あれば吾れと心を合はして小森半左衛門さへ討ち取り呉るれば餘の者は必らず吾れの方を以つて命を取り、一度びは鍋島家を亡ぼさずば相成らん、依つ

て是れより二三町上手に登れば一ツの住む可き箇處ありて其處に食事の用意もあり、必らず吾が言葉を忘るゝなツ」と云ひつゝ其の身をブル／＼と震はすれば、俄かに變はる黒猫の姿、ニヤーツ……といふ怪しき聲と諸共に子猫を連れて遂ひに其の洞穴に這入つて仕舞つた。

餘まりの不思議に呆然としたる來助は、暫ばし其の後姿を見詰めたが來一扱てはお豊の方と思ひしは怪猫にてあつたるか、其れにしても此處は何處の山であるかと、不審の感にうたれて居つたが、是れぞ佐賀の城下より北に當つたる寶満山の山奥、楠の窟である、其處で來助は、お豊の云へるが如く川上の方へ遣つて来て見ると、其處に一軒の猪追小家があつて、何處から運んだものか其處には鯉節やら其他の總て不自由のない様な食物が山の様に積んである。

然るに佐賀の城中に於いては町奉行町田利部より辻々へ制札を立て、

一當領分の中にて怪しき猫と見定めたるものあれば早速奉行所へ届出す可き者也

月日

町田刑部

といふ觸れが出た、是れに依つて城下は勿論近郷近在まで總べて此の評ならざるは無い。

處が此處に小森半左衛門は何うかして怪猫の在所を尋ね出ださんものと思つたが、逆ても普通の事では其の目的を達する事が出来ないから、止むなく日頃信仰する肥後熊本の清正公に一生懸命に祈願を込めるといふ事となつた。

○親子の奇遇

けふと過ぎ明日と過ぎ行く其の中に早や何んの事もなく一ヶ月といふ時を過ぎしたが、一向に其の怪猫を見當らない。

其處で或る日の事半左衛門は高木三平に向ひ半「最うホツ／＼惣太の傷も癒へて来たであろう、何時如何なる事で猫の在所が分かるかも知れないから、何かお前が行いて連れて歸つて来れるように」との言葉を聞いて取るものも取りあへず遂ひに三平は佐賀の城下を後にして有馬へと志した、話し代つて有馬の伊東惣太は丁度自分が来てから二十日餘まりも経つた時分、未だ十分といふ程では無いけれども、兎も角も國元の事が氣にかゝるから有馬を立つて歸ろうといふ前日の事、一ツ町でも見物をせうと、池の坊を出て遣つて来たのが宿外づれの立場茶屋、見ると向ふで何にかヤ／＼大勢の人が騒いで居る、何んであるうと聞いて見ると喧嘩だ／＼といふ事だから、立寄ると一人は年齢五十位ひの六十六部、内儀と見へて一人の女を連れて床机に腰を掛け食事をして居ると其の向ふで旅の武士が三人是れも床机に腰を掛けて一杯飲んで居る、是れは伊豫宇和島伊達遠江守殿の家來で川島一角、餘の二人は自分の門人だ。

元來此の川島といふのは劍術修行の爲め諸國を廻つて居る者であるが、至つて心の宜からぬ主従、殊に酒の上の誠に悪い人間で師弟共必らず終了には誰れかを相手に喧嘩でも初めようといふ人物、今しも大分酒が廻つて来たものと見へて、△時に先生、向ふに腰を下ろして居る六部を御覽なさい彼れの女房に違ひないが、實に可い容貌ではございませんか、川「去れば拙者も先刻から其の事を思ふて居つた處だ」話しながら何にか主従三人は相談をして居つたが、

聴がて件んの六部の處へツカ／＼と寄つて来た三崎寅之助といふ門人は「三コリヤ／＼六部、今拙者の師匠が彼れにて酒を飲んで居るが、貴様等にも同席を許るすと申して居るから兩人にて参いれツ……」六「有難ふはございませぬが、私し共は下月でございませぬから御斷りを申します、三「何にも貴様然う用捨をする事は無い、六「イヤ嫌ひでございませぬから御斷り申す、三「先

生行かぬと申して居ります、川「コリヤ／＼六部、拙者が飲めといふに飲まぬとは何んたる事だ、若し強いて申せば其の分には差し置かぬぞツ、六「否やでございませぬ、川「フム然う云へば刀にかけても飲まして見せるぞ、六「如何に武士とは云ひながら餘まりの無作法、假令如何様に云はれても不承知でござる、川「フム生意氣な奴ツイテ臆づくで飲まして遣る」と云はれて此方の六部も、同じく金剛杖を追つ取つて立上ると、其れに見て居つた女房は、女「貴方、然んな事をなされては御爲めに宜しくござりますまい、川「イヤ女捨て置き、サア六部勝負をしるツ、六「ヨシ如何にも望み通り勝負をいたそう」と今しも一人の六部を相手に主従三人が、一刀の鞘を拂つて立向つた處をフト見たのが伊東惣太、惣「アイヤ御武家暫らく御待ちを願ひたい、最前からはれにて承はれば夫婦の者を捕らへて様々の悪口武士にも似合ぬ致し方でござらんか、川「ナニツ入らざる事だ捨て置き、惣「イヤ捨て置かん、挨拶は

時の氏神といふ事もあれば此の場の事を拙者に任せれば其れでよし若し否やと申せば拙者は六部に加勢を致しますぞッ 川「ウヌ不埒なる言分、如何にも差支ないサア来い」云はれて惣太も騎虎の勢ひ、遂に川島を相手に斬り結ぶ、此方は二人の弟子を相手に六部が立會つて居ると、女房もツツとして居る事は出来ない、持つたる懐劍を抜いて一人の門弟に立向つたから、此處に勝負は三組に分かれて仕舞つたが、何を云つても惣太は氣は確かであるけれども劍道には暗らい、其の上未だ全く病氣本復といふでも無いから、次第々々に川島の爲めに斬り込まれて一足引き二足退き、今や危いといふ處で、飛び込み來たりたる一人の武士、ジーツと惣太の方を見て居つたが 男「オー其處に居るのは惣太でないが、乃公は高木三平だサア加勢をして遣るぞッ……」と聞いて惣太は勢ひ付いたが川島は驚いた、是リア大變前後に敵を受けたかッと思ふ途端に捨身になつて惣太の斬り込む一刀を受け損んじてバツタリ其處

へ倒れた。此方は六部一人の門弟を同じく斬つて落とすと今一人の門弟はコソ叶はじと逃げんとす。處をエイヤツと高木三平斬り付けた、アツといふなり呼吸が堪へる、其處へ宿役人と見へて乗込んで來たから段々調べて見ると惣太三平は 兩人「實は拙者等は鍋島家の臣で斯ういふ次第で斬り殺るした、宇和島藩といふ事であるから掛合ひを願ひたい」とあるから茶店の亭主なぞを證人に調べたが全く三人が悪い。其處で六部夫婦と兩人は一應宿屋へ引取らし、後で三人の者は宇和島へ照會をして見たが然んな者は無いといふ返事で其の儘になつた、是れは後の話してあるが、扱て四人の者は一應池の坊の宿屋へ引取ると 三「惣太兄貴も大變に心配をして居るが、大切な身体で斯ういふ事をするといふ事があるか 惣「イヤ何うも面目ない」と互ひに話しをして居る處へ出て來た以前の六部、

六「扱て御兩人最前は危い處をお助け下されて御禮を申上げる、然し只今其れに御所持遊ばす一刀は少しく手前に見覺へのあるものでござるが何づれでか御求めでござつたか」惣「ハ、ア是れでござるか、是れは親の形身でござる 六「エーッ然らば貴殿は佐賀の片田舎にて楠村の惣左衛門と云ふ者は御存じでござらぬか」惣「何故へ貴公は其れを御存じでござる、其の惣左衛門こそ拙者の養父でございます 六「フム扱ては其方は伴であつたか」と此處に先年國元を出立して其の行衛の分からなかつた、是れが伊村市之丞と唐花の兩人であつたから委細の事を聞いて惣太も大ひに驚るき、暫ばし涙に暮れて居つたが、

是れを側で聞いて居つたる高木三平も共に「〜に貰ひ泣き 三「兎も角も御兩所共是れより佐賀に御出で成されては如何でござる」と此處に代官所へ一應の沙汰をして置いて置いて迷ひに有馬を出立したのが四名の者。

日敷を重ねて佐賀へ歸へり一度び小森半左衛門に面會をして委細の話をする

と半左衛門も非常に喜んで兎も角も惣太の屋敷へ引取る事となつた。然るに半左衛門は相變らず頼りに清正公を祈念して居る中に、此處に其の怪猫の在所が分かつたといふのは全くお豊の方の兄に當たる林藏の爲めであつた。

豫れて林藏は母や恩人の爲めにお豊の方を討たんとして淨林寺の門前に於いて石田來助の爲めに取り押へられ齋田主膳に引渡され、お豊の方からは斬首に處せといふ命令が出たけれども、實は秘かに自分の屋敷へ止め置いた處、此度びお豊の方は全く怪猫の化身であつたといふ事が判明して、改めて齋田主膳より林藏の事を申し上げると、直ちに召し出されて 光「扱て林藏、聞いたであるうが、妹のお豊は全く怪猫の爲めに一命を落とした事であるから、何卒そ其方は是れより其の怪猫の在所を尋ね屹度退治いたして呉れ」と云はれて林藏は有難涙に暮れ、假令如何なる深山幽谷に其の身を隠くすともヤワカ

見出さいで置く可きかと、此處に再び乞食の姿となつて一ツの大きな袋と少さい幟を作りて是れを澤山に携へ、何處彼處といふ事なく深山に入り込み道々には其の小幟を立て、道知邊となし、夜に入つては木の枝に其の袋を釣つて其れに寝むり、毎日々々斯うして其の在所を探ぐつて居つたが、此處に下楠村の獵師に作藏といふ者がある、今日しも何時もの如く鐵砲を携へて寶満山へ登つて来る。

然るに其の日は少しく空も曇つて居つて何うも可い獵が無いが、せめて何にか一疋でも獵て歸られば成らんと、頼りに山又山を尋ねて居る中に、漸うくの事に一匹の兎を見付けたから占めたツと、早速丸込めをしてズドーンツと放なすと惜しい哉前足に微傷を負はしたばかりで件人の兎は跋蹠を引きながら逃げて行くのを此方は作藏が一生懸命、ドン／＼ドン／＼追つて行く中にも一方兎の方も必死の場合、彼れ是れ一里半ばかりも追ひ詰めて、漸う

／＼の事に近付いて鐵砲の臺尻で擲き付け 作「本當に馬鹿に骨を折らしアがつた」と細引きを出して縛り上げ、フト其の附近を見ると、何處を何う來たのか薩張り道も何んにも分らない。

鹿を追ふ獵師は山を見ずとかや獵師の作藏は寶満山の山奥で道に踏み迷ふ前後を見たが、何づれも立樹としては無き禿山ばかり 作「エツまゝ出られる處まで出て遣ろうと、元來大膽なるは獵師の常、ドン／＼登つては下だり下つては登りする事正に二三里ばかり、見ると遙か向ふに當つて左ながら屏風を立てかけた有様の大きな岩がある、多分是れが此の山の絶頂であるうと思つたから其れに向つて又もや進んで來ると丁度其の岩の前が谷間になつて向ふは一筋の谷川の流れが見へる、然かし是れを中々下だつて行く事が出来ないから何うしたものであるうと見て居ると怪しや此の前に一ツの洞穴、フト氣の付いた作藏は 作「ハ、ア是れが豫れて仲間の者から聞いた寶満山の洞穴だる

う」と見るともなしに内等を覗いて見るとコッ抑も如何に其の穴から、ノソリ
 く」と出て来たのは四五匹の怪しき猫だ、見付けられては一大事と、尙ほも木
 陰に隠れて様子を見ると、件の子猫四五匹は口に繩の様なものを咬へて引
 出したが、其の先きに矢張り繩を咬へて引張られて居るのは丈は三四尺も
 あらんかと思はれる半面斑の烏猫、其れが件人の谷川に下だつて水を飲む
 と其儘又も以前の洞穴に這入つて仕舞つた 作「フム扱ては此の間から
 諸々方々へ制札の立つた猫といふのは定めて此の事であるう、フム可いもの
 を見付けた、是れを注進をしたら褒美の金の百兩位は大丈夫だ」と丁度夜の
 明け方までかゝつて麓に下だり、遂ひに下楠村の自分の宅へ歸つて来た。
 處が女房のお松は非常に心配をして種々其の譯りを聞いて見ると 作「喜
 んで呉れ、實は昨夕は斯ういふ理由であつたが、何んでも是れを御届けを
 したら必らず百兩の御褒美は間違ひないのだ、何うか誰れにも云つて呉るな」

と止められたから女房は、兎も角も前祝ひといふので酒德利を持つて表へ出
 て道なら二三町も行つた時分、二三日前から不獵れて居つた獵師仲間の龍左衛
 門に藤九郎と二人の者に出逢つた、四方山の話の末に 松「實ア今お酒を買
 ひに行く前祝ひといふのは、他人には云つては不可ないと内の人が云つたのだ
 が斯ういふ譯で百兩の御褒美の前祝ひだよ」と悉り饒舌つてお松は其
 の儘に其處を立つて行つて仕舞つた。

山嶺の怪雲奇鳴

(談るなと人に談れば其人が又談るなと談たる世の中) お松は夫に口止めをし
 られたのを龍左衛門と藤九郎の二人に饒舌つたから、何にか兩人は相談をして
 其の儘作藏の宅へ遣つて来ると 兩人「實は今手前エの女房から斯ういふ事
 を聞いたよ 作「エーッ女郎饒舌つた 兩人「最う聞いて仕舞つたから駄目だ

其處で作藏、乃公等の考へでは此の儘に御届をして百兩貰へるものなら、殺
 ろして持つ行つたら二百兩は間違へは無エ、其れで手前エは發頭人だから
 幾程か割前を餘計に取る事にして一番反るかそるか強薬で遣付つけて見よう
 じや無エか」作藏も今更ら女房を叱つて見た處が間に合はない、其處で成功
 の時には作藏が褒美の四分後の六分を三分づゝ二人が分ける事にして相談が決
 まり、遂ひに其日は一日十分に休息をして強薬と辨當を辨へて愈々其の翌
 日寶満山へと出掛けた。

稍や見當を付けて置いた寶満山洞穴の此方まで出て來ると 作「サア龍左藤
 九郎彼れを見る、彼處の洞穴が然うだ 龍「ヨシ其れじや此處で飯を食つて
 行こう」と此處に三人は食事を済まし、萬事の仕度を整へて作藏の案内で山
 の上まで遣つて來て洞穴の處を覗いて見ると中々下へは下りる事が出來な
 いから、三人は申し合はして用意の繩梯子を下げて 作「サア龍左衛門手前が

下りる 龍「冗談云つちア行けれエ、手前エが歩合も餘計に取るのだから手前
 エが下りるツ」云はれて作藏は仕方が無い、段々其れを縛つて下りて見ると別
 に變つた事が無いから、兩人を手招きをすると、龍左に藤九郎も同じく下りて
 來て件んの洞穴を覗いて見たが素より眞暗らで陸張り分らない 龍「作藏此處
 に違エ無エか 作「大丈夫だ、然かし何時か此處へ出て來るに違エ無エから、
 乃公は此の正面に構へて居るから、手前等二人は横合で氣を付けて居る、若し
 乃公が仕損じたら手前エ等救けて呉れるツ」ヨシ合點だツと作藏は正面、龍
 左衛門に藤九郎は右と左りに分かれて今にも出て來たら只だ一發と身構へをし
 て居る。

如何に神通力を得たりと雖も若し知らず此處へでも出て來たら其れこそ
 大變だが猫の爲めには幸ひであつたといふのは今日しも多少自分等の餌を探
 がさんが爲めに谷川の流がれを下だつて居つたが、其れとも知らず今しもフ

ト歸つて来て見ると三人が一生懸命に身構へをして居るから烈火の如とくに怒つた怪猫、今しも猫背を立て、ジーツと忍び寄つたる龍左衛門の後の方、不意にギヤーツといふ聲が聞へたから、アツと驚いて振り向くと、兩眼は二面の鏡の如とく、恰かも焔を吐けるが如とき大口を開いて睨んで居るから鐵砲を取り直ほす間もあらばこそ、立上がらんとする處を飛鳥の如とくに飛び付いてガブーリ一口咬み付かれて其の場に斃れたから、側で見て居つたる作藏は、アレーツ……と云ひながら最前此處へ下りて来た繩梯子へ取り付くなり一生懸命駆け上がると、續いて藤九郎、今しも一足繩梯子へ足をかけたと思ひきや、疾風の如とく飛び来る怪猫は、藤九郎の右の足に噛み付いた、アーツと驚く其の途端にバツタリ落ちたから堪らない、ガリ……と食ひ殺した、其の間に生きたる心地も無い作藏は駆け来る足も地に付かず彼れ是れ二三町も来た時分に、何うした途端か片邊の溪間へゴロ……と足

を踏み外して落ちると其の儘氣絶をして仕舞つた。話し代つて此處に宇布美の林藏は前にも述べたる如とく山といふ山溪といふ溪は何處此處の用捨なく探して居つたが今日しも出て来た寶満山の溪間、何氣なく通ふる處へゴロ……と落ちて来た者があるから、見ると早や氣絶をして居る、種々介抱をして居る中に漸う……の事に呼吸を吹き返へしたから、段々様子を聞いて見ると作藏は林藏の姿を見て妙な顔をして居るといふのは林藏は姿が乞食であるから、作「ヤイ乞食手前エが乃公を介抱をして呉れたのか、林「如何にも乃公が介抱をしたが、貴様は一体何うして斯んな處へ落ちたのだ」と聞いて見ると、作「實は斯う……である」と今迄での事を話をするから、林「フム然うか、實は乃公は斯うして姿は乞食となつて居るけれども斯う……したものだ、其れなれば其の見付けた褒美は屹度貴様に貰つて遣るから安心なせい、愈々其れに相違なくば今一度拙者を案

内をせい 作「滅相もない」ビリく 標ふて居る奴を機嫌を取つて漸うく其の近處まで行つて其の場所を確かめ、此處に林藏作藏の兩人は下楠村まで歸つて來ると、其の儘作藏を待たして置き、自分は只だ一人佐賀へ歸つて齋田主膳に一伍一什の物語りをする。

聞いたる主膳は大ひに驚ろき直ちに家老磯早豊前に申し上げる、依つて豊前より小森、高木、伊東の三名を初じめ家中の武士一同を集つめて大評議となり一應光茂公の耳に入れると、此の時は早や病氣も本腹をして居るから委細を言上すると 光「フム然れば此度こそ必らず取逃がさぬ様退治をいたせ」とある。

依つて此度びも討手の大將としては小森半左衛門、續いて高木三平、伊東惣太を初じめ家中若武士の中にて風強の者三百名を集め、先導者としては宇布美林藏に獵師作藏是れを承はり、尙其の他領分内に於いて鐵砲に心掛けのあ

る者は假令町人百姓の嫌ひなく御用命といふ事になると、其の召しに應じたる者は總勢七八十名の多きに達した、其處で半左衛門は以前の例もある事だから類此阿闍梨を願つて凡そ丈け一間餘まりの護摩木、是れに一々阿闍梨自ら梵字を認め、是れに左繩に捻つたるもの數百丈を作つて人足に持たせる。

討手の大將たる小森半左衛門は豫れて用意をして其の身は鎖帷巾を着用なし後鉢巻玉 襷は云ふに及ばず、腰に帶したるは豫れて長州公より賜はりたる菊一文字の小刀に覺への大劍を横たへ、手には弓矢を携へて、若し怪物を見出したる時に於いては直ちに墓目の法を以つて射殺るさんといふ用意を整へた。

尙伊東惣太は未だ傷所は十分に全快をしては居らんけれども行掛り上何うしても養父惣左衛門夫婦の仇を討たれば成らんといふので是れ又十分の用意をなす高木三平も云ふに及ばず同じく勇ましき出立ちに及んだ。

頃しも寛文の十年十月廿二日曉け寅刻の一天に佐賀の城下を發足して騎鼓堂々
 目指す寶満山を望んで貝鐘太鼓の音も勇ましく繰出だす、尤も此度び後陣
 の勢としては佐賀家の一家老職たる城代磯早豊前殿が御馬上
 豊前此の日の出で立ちば紺糸縵しの腹巻きに其身を固め花菱の定紋付いたる
 陣笠を頂き、上には猩々狒の陣羽織にて先づ御領分狩獵の御装束である
 扱て其の二番手としては鍋島三左衛門是れ亦同じ萌黄糸縵しの腹巻きには同じ
 陣羽織、一文字の陣笠を被ぶり數多の家來は馬の左右に控へ、屈強の武士三百
 餘名は其の前後を固ため、眞先きには白地に黒く抱茗荷の紋を染め抜いたる旗
 を翻がへし金色の茗荷の紋の付いたる二方面の大纏を押したて兵糧の用意は
 素より云ふまでも無く、漸やく城下外づれまで乗り出したが、
 此處に城中丹後守光茂公の御側固めとしては老臣鍋島平右衛門を大將とし
 て是れ亦屈強なる武士數多を撰んで守護をなす。

扱ても小森半左衛門は先導者たる林蔵の案内に依つて漸やく寶満山に來て
 見れば、實にも聞きしに優さる深山にて、鬱々たる千年の樹木は實にも天を壓
 するばかりにて晝尙暗らき物凄じさ。
 半ソレ進め……進め……といふ大將の下知に依つて何づれも曳々聲し
 て絶頂の方へ登らんとなし凡そ路なら一里に足らぬ處まで登つたかと思ふ時
 分、今まで晴朗たる一天は俄かに墨を流がすが如とく電光雷鳴は激しくして
 篠突く如とき雨を加へ轟々たる震動は左しもの寶満山を今にも覆さんとい
 ふ有様なれば、折りしも先手に進みたる一群の武士は、餘まりの恐ろしさに其
 の膽を奪はれ、撰りに撰つたる精兵も忽ち後ろの方へ取つて返へして一生懸
 命に逃げ出だしたが、聽がて以前の處へ歸つて後ろを振り向いて見ると、怪
 しや一天晴れ渡たつて空には見る可き雲さへ無い、フム扱てこそ怪物の仕業な
 りしか、其れ少進めくと又もや先きに登つたる處まで遣つて來ると、コハ

抑も如何に又もや起こる一朶の黒雲に天地も崩るゝ山鳴り震動、拳大の石は
 雨霰の如とくに落下する而已ならず、大木は根より倒はれて急阪を轉がり落
 つる其の危険は見る者をして實に其の膽を寒むからしむる有様なり。
 スハヤ又もや妖怪の仕業なり、逃げよくといふ聲に元來恐氣付いたる寄手の
 人数は、宙飛ぶ如とくに一生懸命、後をも見ずに逃げ延びて頂上を眺むれば
 扱ても奇怪や寶満山は深々としてソヨとの音も聲も無し。
 残念なりと半左衛門三度び登らんとすれば三度びの怪異、下だれば鎮まる以前
 の儘、左しもの半左衛門も殆んど途方に暮れたるが、フト思ひ付いたるは、豫
 れて加藤清正法華經を信じて其の法力に依り遂ひに神國の威勢を現はしたる
 三韓征伐の故事であつた。

降魔の句字

抑も清正公降魔の句字といふのは如何なる事であるかといふに、去る文祿年
 間加藤清正正は太閤秀吉公の下知により朝鮮征伐を致されたる時に先手
 の大將として兵糧奉行を兼ね其の勢ひは中々に豪氣なものであつたが、何分
 にも小西攝津守との仲悪しく、遂ひに小西の奸計に依つて南大門を王城に
 進むといふ事になつた。
 然かして小西や浮田等は東大門を進みたるが、清正公は南大門の地理を
 知らない爲めに中々の苦勞、殊に其の道に迷ひて入る事も出ない事
 いふ時に清正公は一生懸命北辰妙見を命じて漸うくの事に百濟國の中
 にて海汀倉の城下を見出だして是れに乗込む事となつた。
 尤も當時は朝鮮未だ三韓と云つて一を新羅、高麗、百濟是れが即ち三韓
 である、其の中にも今清正公が乗込んだるは百濟國とて最も繁華を極めた
 る土地であつたが、此の國を預つて居る大將は名を韓克威と稱へて餘程の

豪傑であつたが清正公は只だ一擧に是れを亡ぼして仕舞つた。
 其後城内に於いて十分慈悲の政治を行ふたが爲めに日本軍に親しみ、分け
 ても清正公の下知を受けるといふ事となつたが、此處に當地の者から願ひ出
 でたる一義を聞いて見ると、當所から北に當つて兀良哈といふ處がある、此
 處は朝鮮の都よりも餘程離れたる處であつて其の地を守護して居る者は名
 を婆娑喝鬼大王といふ、實に古今無双の豪傑であつて、是れが時々海汀倉
 の都を暴らして賊に等しい行ひをなし、多くの獸類を捕へては食ひ、實に
 野蠻極まる事をなし、然かも人民の澤山に住居をして居る百濟國を犯さんとし
 て其の時機を待つて居るといふ事であるから何うか日本軍勢に依つて宜しく御
 征討を願ひたい、尤も此の處へ行くには道に千里ヶ原といふのがあつて、
 日本里程で云へば百五六十里もあるといふ大原、此の間に於いて生育して居
 るのは葭蘆ばかりにして然かも人間の丈よりも高かく他に樹木といふものは更

らに無い。
 依つて是れまで度々海汀倉の者が彼の國を攻めんとして國境までは行く事
 が出来るけれども、其處で必らず不思議なる事がある、尤も兀良哈の婆娑喝
 鬼大王の味方を致す者に白雲仙人といふのが住居をなし、若し百濟より攻め
 登る時には魔法を遣つて常に火を降らし山鳴り震動を起し大木大石の一
 時に崩れ來たる有様を見せるから、是れが爲めに折角の寄手も何うも此處を通
 ふるといふ事が出来ない。
 是れが爲め左しも三韓國の豪傑と云はれたる韓克威と云へるものも是ればか
 りには僻易して今日迄で捨て置いてあるのだが、
 一年是れを海上より攻め登らんとしたたが是れ又失敗に終つたといふのは
 兀良哈は又水練水泳に非常なる妙技を得て、若し磯邊近く寄る時には水中
 を潜ぐつて一々船底に穴を明けるが爲め愈々沈んで終う。

斯くして海陸共に如何んともする事が出来ず、三韓の土地は是れが爲めに永
 久の平和を保つ事が能はぬといふ。
 然るに今回大日本國の鬼將軍加藤清正公此の地に軍陣を構へたるゆへ、一
 層神國の威勢を以つて此の國を平げて下されたいといふ事を、日本で云へ
 ば名主とか町人頭とかいふ者から清正公に願ひ出でた。
 是れに依つて加藤清正、假令白雲仙人如何なる妖術を以つてする共、吾が
 日本は神國であるから、其の神力を以つて是れを退治するに何程の事やあらん
 と、彼の麻田嶺の麓まで來たり、貝鐘法螺を鳴らして攻め寄せると、時しも
 あれや山上よりは目に餘まる大木大石雨霰の如とくに降り來たる、左しも
 勇猛無類と稱せられたる日本軍も此の勢ひに僻易して何づれも山麓まで逃げ
 下だる。
 是れを遙かに見てあつたる鬼將軍清正は、吾れ日本神國より來たりて斯く覺

術の爲めに惑はされ乗込む事能はざるとは實に軍人として心外千萬の事であ
 ると、種々工夫をして見たが、何分地理に明かならざる場所なる上に、相
 手は無類の豪傑然かも魔術を用ひる事であるから、殆んど其の方法に困つて仕
 舞つた。
 其處で清正公は夜中秘かに陣中を忍び出で、彼方此方と見廻はりをして居る
 時分に、丁度出て來たのが深々たる森の中、フト耳に響く鐘の聲、ハテ不思議
 の事であると、其の聲する方へ段々寄つて行つて其の様子を探ぐつて見ると、
 怪しや其處に一軒の寺があるから、スツと這入つてツツと中の模様を見ると
 今しも本堂の方に當つて一人の僧侶が餘念も無く讀經をして居る有様。
 今しも誰れか人の氣合がするからフト後ろを向ひて見ると九尺にも垂々とす
 る軍人がニユーツと立つて居るから驚いて、僧「是れは何れから何用あつて
 かゝる處へ御出でに相成りました」清正公も驚いたのは其の云ふ事が日

本語であつたのだ、何故へかゝる處に日本人が住んで居るのであると思ひながらも、清「其方こそつゝる深山に何用あつてかゝる讀經をなし居るや僧」イヤ其の御疑ひは御道理であるが、拙僧は以前長崎の唐人寺に居りまして佛學の修業をなしたる志願禪師といふ者でござるが、御大將には何人にて渡らせられるぞ、清「吾れは日本の加藤清正といふ者である、僧「フム……扱ては肥後熊本之城主にて在らせられるか、御高名の程は豫れ承知いたして居ります、シテ如何なる御用向にてかゝる處へ入らせられましたるや、清「去れば實は簡様々々然かゝにて其の様子を探ぐらん爲め遙々是れまで参つたものである」と一伍一什の物語りをすると、僧「フム其の義なれば豫れて此の山中に住ひをいたす白雲山人と云へる者怪し氣なる魔術を行ひまして是れまで海汀倉より乗込まんとする者は何づれも此の妖術の爲めに進む事能はず然かし是れは又其の法を破ぶる可き手段あり、其は外ではござらぬ、此處に普

門品の中にて稱へる句がござる、假令雜兵なりとも此の文句を覺へて稱へる時には必らず其の魔術を破ぶりて事無く乗込む事が出来ませれば必らず御忘れ無き様、然かし其の文句といふは「怖畏陣軍中、念彼觀音力、衆怨悉退散」といふのでござる」と聞いて喜ぶ清「正公は、清「イヤ有難たい事である、何づれ兀良哈攻落の後、改めて面會をする事である」と此處に其の僧侶と分かれば告げて、早速本陣をさして歸つて來ると、直ぐに人數百人づゝを集つめて此の文字を教へると、素より短かい句字の事だから、直ぐに覺へて仕舞つた。

扱て翌日になると何づれも此の句字を稱へながら段々山に登つて來ると果たして何んの變つた事もなく遂ひに絶頂に登り詰め、圖らず此の山に住居をなせし白雲仙人といふのは清正の臣にて勇猛絶無と云はれたる井上大九郎の爲めに殺るされ、其の上千里の廣野を越して遂ひに兀良哈に進み激戦の後婆娑

喝大王を生捕りとなしたるが、是れは後年清正の臣となり日本に來つては
 發婆勝左衛門と改名をして一生を終つたといふ事がある。
 扱ても小森半左衛門は自分が豫れて怪猫退治の祈念として清正公を信仰して
 居つたる爲めに、フト此の一條を思ひ出し、假令朝鮮と日本とは國こそ違へ、
 等しく神佛の功力に依る處に違ひは無い筈であるから、何卒此の句字を以
 つて妖猫怪異の魔術を挫ききて然る後首尾能く其の本望を達したものである
 ると思ひ付いたから、俄かに高木三平と伊東惣太の兩人を呼び、半扱て兩人
 實は斯うして三度四度、怪異の爲めに失敗に終るといふは殘念千萬、若し此の
 儘に相成る時は生きて再び主君に御目通りをする事能はず、依つて是れく
 の事を思ひ出したるから、必らず明日は此の句字を稱へて總勢登山をいたして
 見よ必らず神佛の加護を受けるに相違あるまい、兩人「如何にも兄上、其れは
 宜い處へ御氣が付かれた、其れでは早速此の事を寄手の人數に教導いたしま

せう」と此處に高木、伊東の兩人は夫れく定めてある小頭を呼びて是れを傳
 へると、其の小頭より人足や其他の者に此の句字を教へる、素より甚だしく
 六ツかしい句でも無いから直ぐに覺へて仕舞つた。
 其處で此の趣きを大將分たる半左衛門に通知をすると大ひに喜んで「半」
 然らば早速に攻勢の用意に及ぶ可し」とある。
 其の日は暮れて其の翌朝未だ明けやらぬ寅の刻、第一番の先手としては云は
 すと知る、先導者たる楠村の獨師作藏と、宇布美村の林藏の二人、續いて伊
 東惣太は二百人の勢を引連れて此の先導者を保護旁々此の先陣を承まは
 る
 第二番手としては小森半左衛門、其の守護としては高木三平同じく二百人の同
 勢を引率する。
 第三番手としては力士組み其の他城下近郷近在の百姓町人にて心利きたる

者凡そ百名ばかり。斯く三手に其の同勢を分かちて何づれも豫れて教へられたる句字を稱へながら寶満山をさして分け登ぼるは實にも物凄きばかりの有様であつた。然るに不思議な事には段々山道にかゝつて来て、既に昨日登つたる處あたりまで來たけれども、神佛の功力は争はれぬものだ。更らは何んの不思議もない。彼れ是れ二里餘まりも登つたる時に其處等一面は平坦になつて居つたが、先づ當日第一とも云ふ可き澤谷口といふ難所にかゝつて來ると、此處は右手が見上げるばかりの高山にて左手に溪間を控へ至つて道巾の狭まい處で凡そ三十問程の間といふものは漸うくの事に人なら二人組み合つてなら通ふる事が出来る位ひ、其れ以上は逆ても危険で通ほるといふ譯けには行かない。其れが爲め萬一片足でも踏み外づそうものなら其れこそ一方の溪間へ落ち込む憂ひがあるから半左衛門の指揮に依つて成る丈け山の際に寄つて木の根草の根

を掴みながら此の僅かの間を通ふるといふ事とした。其處で首尾能く先手の惣太の同勢は通つて仕舞つたが後に續いて居る小森半左衛門の二番手、今しも前列百名は無事に通ふり抜け、中央には半左衛門が高木三平と同列となつて其の中程まで來ると、此處は丁度向ふに一ツの森を控へて何うも先きが十分に見へない位ひの處。時しも何氣なく通つて居る半左衛門の其の前へ、略を被ふるズドーンツ……といふ鐵砲の音、ハツと流石の半左衛門面を横に向けたる處を彈丸はピューッ……と眉間を微觸つて遙かの谷間へ落ちて仕舞つた是れが爲めに左しもの半左衛門も二番の彈丸を恐れて大地にバツタリ倒れる處を、眺めたる高木三平「三ッ又曲者ッ……かゝる深山に於いて大將を討ち取らんとするは何者であるぞッ……」と心を定めてシューツと様子を窺ふて居ると、遙かの森蔭に一人の曲者、今しも再び彈込めをして高木三平に視ひを付け、既に放たんとす

る有様に、己れツ……と一聲ズラリ一刀の鞘拂ひに及んで件人の曲者の側へ躍りかゝつた疾風迅雷の其の勢ひに、彼方も去る者仕損んじては一大事と、少し狼狽してズドーンツ……と又もや一發發射したる其の弾丸は天の祐けか三平の頭の上一尺ばかりの處をビューツと風を切つて飛び越した。

⊕最後の怪猫

天道は實に惡に組みせず、此處に寶満山澤谷口に於いて小森半左衛門は不意の災厄、續いて高木三平は二の丸を食つたけれども、如何でかゝる悪人の丸に當たらん謂れなし。

ビューツと頭上を弾丸が飛んで仕舞つたから三平は、心得たりとバラ／＼……件人の曲者の處に近寄るが否なやエイツ……一刀の下に斬り付けると、素より去る者、鐵砲を取り直ほすと其の儘に其の臺尻でガチツ……と受け止め

たま、腰なる一刀引抜いて、ヤーツとばかり三平望んで斬り込む様子に、猪才なる曲者かなツと、チャリン／＼チャン／＼……此處澤谷口は不意の突戦双方とも火花を散らして戦つて居つたが、素より高木三平は、活氣に満ちたる青年なれば彼れ是れ五六合も戦つて居る中に、今や一縷の隙を見止めたから、エイツ……とばかり件人の曲者の右の肩先きから左りの脇腹かけて斜に斬り下げられ、何かは以つて堪る可き、アツと其儘倒れる處を起こしも立てず二の太刀を入れたから、ウームと云つたが此の世の分かれ、高木三平は「三何者なれば斯く吾れ／＼に仇をなさんとなすか、是れも全く妖怪の仕業であろう」と此の曲者の鬚を引搦んでグーツと引上げて能く／＼顔を見ると驚いた「三」オツ扱てこそ此奴は石田來助、豫れて罪あつて斬罪に處す可き處其の刑場より行き方知れず相成つたりと聞きたるが、フム一箇様なる處に住居をいたすは、是れも一ツの不思議であるツ」と早々道端へ引出して 三三

兄貴傷は何うだ太した事は無いか」小森半左衛門は漸う／＼の事に起き上がつたが、半「イヤ氣遣つて呉れるな大丈夫だ、イヤほんの微傷ではあるがヨモヤ斯んな處に斯ういふ者が居ようとは更らに思はなかつたのだ、今聞いて居れば石田來助といふ事だが其れに相違ないか 三「如何にも石田來助だ、何うして此處等に居るのдарう、殊に彼處に二三挺も飛道具が置いてあるが其れも不思議でならぬ 半「ハ、ア扱ては判つた、其れこそ先日作藏や龍左衛門藤九郎等が忘すれて歸つたといふから、其れを秘かに盗んで居つたに相違あるまい、然かし何にしても此の森中は怪しいから氣の毒だが今一度調べて見て呉れ 三「イヤ承知した」と血氣に逸やる高木三平は、今や以前の森林に取つて返へし彼方此方に見てある中に、不思議や闇黒にして慥かに其れとは分かれども、丈けにも餘る岩の上に、ギラリ／＼と光りを放なつば左ながら日月を一處に並べたるかと思ふばかりにして是れぞ正しく彼の半面斑の烏猫に相違な

いから、其の身を忍んで尙ほも様子を見て居るを知るや知らずや件んの怪猫は四方八方を睨め廻はし、口は耳まで割れたるばかりの其の中より紅ひの舌を吐き出して今にも火を吹かんばかりの其の勢ひ、牙を鳴らして怪し氣なる聲を出し、ギヤーツウー……ギヤーツウー……と啼いて居る。

此の時高木三平は 三「フム……愈々怪猫が出て來たなッ、ヨ一シ今に三平の一刀を以つて眞二ツに致して呉れんッ……」と持ち直ほしたる大刀を大上段に振り被ぶりエイツ……とばかり猫を目標けて飛び込み來る。

案より猫怪も斯くある可しと思つたか飛鳥の如とくに其の身を躡はすと諸共に以前の岩の上に飛び上がり、ウーツ……ウツといふ怪音と諸共に、又もや斬り込む三平の又を潜ぐつてギヤーツといふ一聲諸共飛びかゝるを、己ぬッ……とばかり三平は一刀を横に拂へば 過たす面上を一刀切り込んだが怪猫は是れを事とせず、今や三の太刀を入れんとする其の一刹那、ギヤツと三平の肩口

深く咬み入つて、ブル／＼／＼と振り付けられ流石の三平も堪り兼ね
 ムンズとばかり組み付くと此の時一天は俄かに掻き曇りて山鳴り震動は物凄
 く實にや一時に天地も覆へるかと思ふばかり、折りしも三平と怪猫は組んだ
 るまゝにゴロ／＼／＼と道の中央に落ちては来たが、何んしろ巾の狭い處
 だから、アレヨツといふて居る中に、又もや猫と諸共に千尋の溪間へドツ……
 と落ち込んだ、餘まりの事に半左衛門は三平を救けんとは思つたが其の寸隙も
 あらばこそ、殊には千尋に餘まる溪底にて然かも綾目も分かぬ有様に何うする
 事も出来ない。

稍や半時餘まりといふものは何にか怪しき物音がして居つたが其れも暫らくの
 間に静まつて仕舞つた様子、小森半左衛門は心中に、逆ても斯ういふ事では
 三平の生命の程も覺束ない、如何はせんと考へて居る處へ、既に十四五町
 も先手に行つて居つたる伊東惣太の一番手は前刻二番の砲聲に驚いて取つて

返へして来た、其處で半左衛門は有りし次第を物語ると、伊東惣太は齒噛みを
 なして無念がり、惣「フム……扱ては此の附近に左様の怪物が居つたとも氣付
 かざりしは残念なり、去りながら兄貴は儘かに此の溪底に落ちたとあれば此の
 儘に捨て置く事は相成らん、イデヤ見付けて来たらんツ」と既に飛び込まんと
 する處を、半「ヤレ待て惣太、其れこそ匹夫の勇といふものである、斯く黒
 白も分からねぬ谷底には如何なる者があるかも知れず、兎も角も何者かに申し付
 けて一應調べさせる事にいたさん」と早速足輕頭村上五郎太夫を呼び出だ
 して、半「實は斯う／＼であるから、直ちに畚の用意をなし是れより釣り下げ
 て様子を見届ける事にいたせ」とある。

扱て愈々其の準備は出来たけれども全体何に居るか、何ういふ仕掛けがして
 あるか分からない生命懸けの仕事だから吾れ行こうといふ者が無い、半「イヤ
 決して心配をいたす事は無い、斯く三個の畚に乗り竹法螺を持つて下たり苦し

怪しき事あれば直ちに其れを吹いたら引上げて遣る、畢竟此の溪底は何程あるか、高木三平は何うして居るかといふ事さへ分かれれば其れで宜い、首尾能く見定めたる者は御主君に申し上げて士分以上の者に取り立て、遣るぞ」と云はれて仲間、足輕も互ひに顔と顔とを見合せた。

身を捨て、こそ浮ぶ瀬もあり、虎穴に入らずんば虎子を得すとかや、今しも半左衛門の言葉に依つて進み出でたる足輕は田中又助、相馬元七、清水貞三といふ此の三名。

三人「然れば吾れ、三人にて御役目を勤めませう」と何づれも後鉢巻玉の用意を十分に致し、竹法螺を携へ松明に、燈火を點し覺への一刀を引抜いて、用意の眷に打乗つて上からシリリくと下がつて来る。

見ると此處は丁度山と山との間になつて居るから昔は滑かにして左して大木といふものは無いから松明の燈火で十分に向ふが見へる。

高木の死骸は何うしたろう、猫の奴は何づれに居るのだらうと見て居ると、丁度其の底に一ツの急流があつて其處へニユーツと出て居る岩がある、能く見ると是れに引かゝつて居るのは儘かに三平の死骸であるから下へ降りて向ふを能く見れば三平は半面をグスグスに咬まれ一刀は中央程から折れたまゝ、恨みの眼を張り開けたまゝで下がつて居る。

田「何うだ清水、何んとなく物凄く處だが、何うだらう彼の高木さんの死骸を取るとすりア此の川を渡らねば成らねエが、若し然うして居る處へ猫でも出て來たら其れこそ大變だ、處で斯うしよう、上にあがつて實は斯うくと三平様の刀に血が付いて居る處を見ると三平さんが死んだと同時に猫も殺るしたに違ひ無いが、定めて川を流がれたのでございませうから川下で調べて見たら分かりますと云つて乃公等の役さへ濟ましたら其れで首尾能く士分以上の出世が出来るといふものだ、清「其奴ア上分別だ、其れじア然ういふ

事にしよう」と此處に三人は打合せをして合圖の竹法螺を鳴らすと、ソレツ：
 ……といふので漸う／＼無事に上がつて来た田中相馬の兩人最前打合した
 通ふりに半左衛門へ上申をして居ると、清水貞三と云ふものゝ春が何うしても
 上がつて来ない、是れは不思議であると思ふて居ると、此方は貞三、上からグ
 ン／＼引上げる處が何うした途端か谷間から出て居る木へ其の春が引か、つ
 た、其れを無暗に引張るからまるで木の杖の爲めに顔手足は傷だらけ、バタバ
 タして居る處へ、一聲ニヤーツ…といふ奇聲を發して飛び付いたる件んの
 怪猫はビユーツ…と風を切つて貞三に飛び付き、肩のあたりにガンジリ咬み
 付かれて、アーツといふと其の儘氣絶をして仕舞つた、其の中猫は何處かへ行
 つて仕舞う、上では首尾能く引上げて呉れた。
 半左衛門は見ると斯の有様だから何うしたのかと聞くと、身を慄はして貞三は
 貞「實は斯う／＼であつた」と話したから三人の口が合はない、然かし

然んな事に關はつて居る事は出来んから、側で聞いて居つた伊東は 惣「兄貴
 其れじア此の谷間に慥かに猫が居るに違ひないから是非共乃公が行つて見よう
 林「イヤ其れなれば乃公もお供もせう」と以前の如とくに兩人は用意をして
 若し斯うといふ時には合圖の法螺を鳴らす事として段々春を下だつて谷間に
 落ちて行く。
 惣がて兩人はフト向ふを見ると、今しも三平の引か、つて居る岩上に背を立て
 牙を鳴らし、今にも此方をさして飛びかゝらんといふ勢ひ 惣「フム林藏
 居るぞ氣を付けるツ…」 林「ヨ一シ合點だ、今度こそは許さんぞツ…」と
 云ふ中に惣太は用意の鐵砲を持つてズドーンツ…と放なすと、コハ叶はじと
 思つたか、ビユーツと風を切つて五六間向ふの岸に飛び下りると、一生懸命
 川上をさして逃げ出した、逃がして一大事と惣太は、今しも下へはまた七八間
 もあるうといふ處を下ろして呉れる間が待てんから、一刀引抜き春の繩をハ

ツシと切つたから其の身は脊と共にズンデンドスンと下に落ちると其の儘猫の後を追つかけた。

上では今しも鐵砲の音がしたが、訝に響いて是れを法螺の聲に聞いたから、ソレ引上げるツといふのでズン／＼引上げて見ると惣太の方は軽いから上がつたが、林藏は下ろせツ……といふ聲が聞へすに凡そ上まで七八間といふ處まで引上げられると、下ろせツ／＼といふ聲が初じめて聞へたから又もや繩を延ばすと漸う／＼の事に麓に下りたから林藏も其の儘後を追ッ蒐けた。

是れより先き伊東惣太は怪猫の後を追ふて凡そ半里餘まりも登つたといふ時分フト見ると正しく是れが豫れて聞いて居る寶満山桶の窟に違ひない、尤も是れば本道來ると四五里もあるのだが、谷底を廻れば僅かに半里餘まりで其處へ着く事が出来る。

時しも遅れ走せに遣つて來た林藏は、
 林「オ、其處に居るのは惣太でないか、

其れこそ桶の窟だ氣を付ける。惣「ヨシ大丈夫だ決して心配すなッ、然かし林藏、乃公は此處に張番をして居るから貴様は早やく歸つて小森の兄貴に此の事を云つて呉れ。林「一人では危険だらう。惣「ハッ、ハッ、ハッ、ナニ是れしきの事何んであるう、サア早やく行つて呉れ。林「其れじア頼んだッ」と此處に林藏は再び以前の道を取つて返へし、此の事を話するとソレ行けッ……といふので總勢は鯨波を作つて桶の窟をさして遣つて來る。

漸う／＼其處へ來て見ると伊東惣太は一生懸命今にも出て來たら斯うして遣るう」と身構へをして居るが、中はシオンとして静まり返へつて居るから半惣太失急つては不可ない」と先づ件んの護摩木と七五三を十分に結び廻ぐらし半「サア斯うして仕舞へば決して何處へも逃げる處は無い、然かし今日は最早や夕刻であらから愈々明日の事にいたそう」と其の夜は此の山中に夜を明かし明ければ寛文の十年十月廿七日、半左衛門は三十名ばかりの砲手を揃へて

其の洞穴へズドン／＼／＼と續け討ちに討ち込んだが何んの手筈へも無い、其處で惣太は惣是リア定めて穴が曲がつて居るから鐵砲が當たらんのだらう、其處で乃公の考へるには林藏と二人で中へ這入つて見るから、若し外へ飛び出したら砲口を揃へて打つて下さい」と云はれて半左衛門、其れは餘まり無法ではあると思つたが中々に惣太は聞かない。

林藏惣太の兩人は片手に松明を携へて段々奥の方へ遣つて來ると、凡そ十四五間の處で穴は左りへ曲がつて居つて其の中には實に堪へられない臭氣が鼻を突くばかり惣太、ア此處等に違ひないツ」と又もや三四十間も行つたと思ふ頃、此方に光かる怪物あり、ニヤーツ……ウーム……といふ唸り聲、アツと思ふ間に飛鳥の如とくに飛びかゝる惣太の肩先き、ヒラリ体を躲はして居る中に、此の鳥猫に仕へて居る數多の猫は叶はじとや思ひけんドン／＼表の方へ逃げ行く有様。

見向きもせず林藏惣太、氣を付けるツといふ合圖と共に、少しの油斷もあらばこそ。

時しも一陣の怪風は此の洞穴に起こりてビエーツといふ唸りと共に四五尺にも餘まる鳥猫は林藏惣太の間を通つて外の方へ飛び出した。

御参なれツ……と兩人は續いて後を追ひ行く中に怪猫は今や洞穴の外へ出たかと思ふ頃、エイツ……半左衛門は持つたる手槍にて怪猫の横腹深く突き貫き、ギヤーツ……といふ叫びを上げて居る處へ飛ぶか如とくに駆け付けたる兩人は、躍りかゝつてエイヤーツと斬り付けられ、左しも神通力を得たりといふ鳥猫も遂ひに其の場に呼吸絶へた、是れに於いて愈々日頃の本望を達したる三人に三平の死骸を引上げ、數多の眷族たる子猫の死骸十七疋と諸共に遂ひに城外まで運び來たり、此の趣きを城中へ注進をする。

然かしかゝる怪物を主君にお目にかけるは恐れありと磯早豊前の計ひを以つ

て首打落として刑場に曝らしたが晝の中は格別の事は無いけれども、夜に入ると兩眼を開いて人々か恐れをなす、依つて類典阿蘭梨の祈念を乞ひ遂ひに其の死骸を焼き拂つた。

是れに依つて半左衛門は三百石の加増、伊東惣太は百石の加増となり後ち伊村市之丞唐花の兩人を自宅に引取り、高木三平は主君も非常に不慍に思はれ改めて宇布美林蔵を以つて高木三平と改名をさせ是れ亦三百石を以つて召抱へ、伊東、高木、小森は鍋島家の三勇士として其の芳名を千載の後ちまで残こした是れぞ佐賀怪猫傳の概略である。

鍋島 佐賀怪猫退治 終

大正三年五月五日印刷
大正三年五月十日發行



(錢五拾貳金價定)

著者兼 發行所 大淵 浪

印刷者 吉村 源次郎

印刷所 山田 元吉

大阪市心齋橋北詰

發行所 駸々堂書店

電話長南千〇〇七番
振替大阪千〇卅五番

佐賀怪猫退治

24

大正文庫

袖珍形總布製
金字天金頗美
製本携帶至便

正價各 廿五錢
郵送料 金四錢

名けて大正文庫と云ふは畢竟大正の聖代に生れたるを以てなり、其職むる處は時代を論せず種別を問はず凡そ世上に面白しと云ひ趣味ありと唱ふるものは追次刊行して餘すなからんとするは本書の趣旨なり、故に稀代の豪傑談もあるべし、一讀臆を解かしむべき滑稽珍談もあるべし、洒落なる茶話もあるべし、沈痛慘憺たるも悲劇あらん、只た夫れ見る人の好む處によつて撰擇され、愛讀あらんことを希ふ、即ち既刊の種目を述べんか左の如し

(1) 一休禪師

泣くも一生笑ふも一生、米の飯は糞となるもの人は死して土となるものと人世を喝破したる一代の名僧一休大和尚の面影は本編によつて餘す處なく、親しく其面貌に接する思あらしむ

(2) 左甚五郎

名匠は由來世路に長じたるものにあらず、而して其長びざるによつて自然的の滑稽は生ずるなり當代の名匠左甚五郎の如きは即ち其最も冠たるものにして輕妙なる滑稽に至る處に風發す

(3) 乃木大將言行錄

純忠至誠、以て先帝に殉じたる乃木大將の英名は風にはれを知る、然も其生前の偉蹟に至つては知る人少し、本書集むる處即ち是れにして以て大偉人の面影を偲ふべく後代の箴たるべし

(4) 譽之大久保

世人頑固老爺の彦左衛門、狸老爺の彦左衛門を知らるもの多く淡骨殘々たる彦左衛門を知るもの少し、頑固老爺又た一片の俠骨あり、狸老爺又た救世の智を有す、疑ふ者は先づ本書を繕け

(5) 天下之豪傑揃

徳川氏三代家光の世武道の大豪傑と目されたる柳生重兵衛を初め荒木又右衛門、宮本武蔵金森源太郎、塚原左門等を初め有ゆる諸豪傑揃にし一讀肉躍り血進しるの概あるべし

(6) 天下之豪傑 武術大試合

天下の豪傑揃ひの後編なり徳川家光公時代の諸豪傑、各自獨特の勇を振ひ妙技を現はし編を削つて活躍の情を遺憾なく描けり、天下の豪傑揃ひを讀みたるの士は更に本編に眼を轉ぜよ

(7) 茶室落語

一度口を開けば解頤百番燦も笑ひ鬼も裸足で逃げ出すは曾呂利新左衛門の落語なり、本編は其落語中尤も輕妙なるもの十數篇を藏めしものにして蓋し斯界の珍と云ふべし

美術の譽

矢代騷動

天下之豪傑

曾呂利新左衛門

(8)	九州御陣 豊公御前相撲	(9)	水戸黄門 東國北國漫遊記	(10)	水戸黄門 東海道漫遊記	(11)	水戸黄門 中國漫遊記	(12)	水戸黄門 九州四國漫遊記
本書は豊公征韓の師を起されし當時、九州の名護屋にあつて無聊を慰めんと爲め幾多の名臣勇將に命を下して御前相撲を催されし勇壯活潑なる物語りを述べたるものなり。	滑稽談中自ら仁あり義あり信あり禮あるは前中納言水戸光圀卿の漫遊記とす、本編は第一回と願して先づ東北地方の漫遊記を述べ、讀者單に解頤の滑稽談として讀過すべからず。	黄門卿東國漫遊の次篇として讀むべし、江戸出發より近畿地方に至る漫遊記なり、道中偷盜あり、惡奉行あり、無道の臣あり悉く卿の本名を聞て其前に萎縮し大滑稽珍談を演出す。	東海道に次での漫遊記なり、變幻極まりなき光右衛門老人、武勇並びなき助さん格さんの働きにふり、いよ／＼出ていよ／＼妙を極む、本編には有名なる楠公の建碑談あり。	最後の漫遊記なり、筆を中國の西端馬關に起し九州各地を経て四國漫遊の珍説奇話を蒐む、編中偽黄門卿あり、天狗問答あり、其他讀むに入つて自ら哄笑の禁ぜざるものあらん。					

(13)	不思議揃 怪談百物語	(14)	軍事探偵 山岡勝子	(15)	軍神橋中佐	(16)	菊池幽芳著 春日野若子	(17)	忠勇 木村長門守
草木も寝靜む丑滿時、何處からかホーンと響く鐘の音は陰に湧へて……と云ふ圓朝張りの怪談は最早時代に遅れて居ると云ふ處から、新たに集めた當世式の然も凄味タツプりな妖怪談也。	軍事探偵は剛健の男子より尙且難しとする處、然も富豪の一令嬢にして其變轉たる境遇に依るとは云へ四圍敵手の裡にあつて首尾よく大功をたてたる壯烈なる物語也、時は日露戰役の際。	純忠至誠以て鬼神を震駭せしめたる一代の大偉人乃木大將閣下の爲め名譽の戦死を遂げたる橋中佐の言行も又た我が國民として大に學ぶべし。	菊池幽芳氏は關西文壇に於ける驍將也、家庭小説家としての大家也、本編は其幽芳氏の筆に自ら同情の涙禁せざるものあらん、先づ繕けりしものにして悲惨なる少女小説也、讀過一編大阪城の末路に於て棹尾の花を飾りたるは常陸介の息木村長門守重成也、本書述ぶる處即ち是れが事蹟にして沈勇剛毅事に當つて動ぜざる壯烈なる美少年の風姿、紙上に横溢するを覺へん。						

(22)	(21)	(20)	(19)	(18)
<p>諸國漫遊 豪傑磯畑伴藏</p>	<p>豪傑犬塚信乃</p>	<p>菊池幽芳著 無言の誓</p>	<p>菊池幽芳著 二人娘</p>	<p>探偵實話 淵上義政</p>
<p>將軍の指南番柳生飛彈守宗冬の勇名は二階笠の 故事を以て頗る名高し、我磯畑伴藏は實に此の 飛彈守を指導したる天下の大劍客にして、其漫 遊中の事蹟は自ら骨鳴り血漲るの感あるべし</p>	<p>犬塚信乃は曲亭馬琴翁の名著里見八犬傳中に現 はれたる入犬士中の随一人也、彼が父番作より 授けられたる名刀より累をなして如何に悲痛壯 烈なる経路を辿りしかば本書によつて讀め</p>	<p>妖幻談、探偵談、家庭小説は是皆趣を異にした るものにして到底調和すべきものにあらず、然 も一管の靈筆能く是れを配合して讀過巻を覆ふ の違なからしむるは本書也、筆者は菊池幽芳氏</p>	<p>菊池幽芳氏が靈妙なる筆を以て描かれたるもの にして人情の機微を盡し現代處女の心裡を穿ち て遺憾なく好箇の家庭讀本として又見るべし のみならず好箇の家庭讀本として又見るべし</p>	<p>又の名官員小僧と云ふ、蓋し風貌を官吏に装ひ たる強賊なればなり、高官にして醜陋なる兇賊 は古來多しとすも彼は強賊にして然も兇ならず す稜々たる義膽を以て社會に活躍せる快漢也</p>

174
880



終



(24)